

第1章 研究の目的と経過

1 研究の目的

本研究は、古墳時代中期における日本と東アジア諸国との技術・文化交流の実態究明を大目的とし、その基礎構築の一環として奈良県五條市に所在する五條猫塚古墳出土品の調査と検討をおこなうものである。

五條猫塚古墳は、蒙古鉢形眉庇付冑や金銅製龍文鍔帯金具をはじめとする武器・武具、斧・鑿・鋸や鉄鉗・鉄鎚・鉄床・鑿などの工具など、「大陸・半島文化」と「技術」を象徴する金属製遺物を豊富に副葬した古墳である。周知のように、古墳時代中期、主に5世紀を中心とした約1世紀間あまりの時期は、巨大古墳の登場に象徴されるように強大な王権が確立し、統一国家が始動する時期であり、その背景として須恵器生産や金属加工技術、馬匹文化など大陸・半島から様々な新技術が受容・活用されたことが知られる。それは製品の輸入に留まらず、技術集団の渡来による技術移入や、特定氏族の職能的な技術伝習などによって定着・拡大したものと想像される。しかしながら、その実態を示す考古学的資料は必ずしも多くない。殊に当該期に長足の進歩を遂げる鉄製品生産や武器・武具類の製作技術の追究に関しては、遺物の種類・数・質などにおいて五條猫塚古墳の出土品は非常に貴重であり、昭和33年(1958)の発掘から半世紀以上が経った今日においても、これ以上に充実した一括資料には恵まれていない。畿内王権の中心に近く、かつ外来文物の玄関口の一つである和歌山方面に開けた場所という当古墳の立地も、技術の受容者層を考える上ではほかに替えがたい魅力を持つ。向後も当古墳の情報が価値をうしなうとは考え難く、むしろ対外交渉史の標識資料として常に参照・比較検討され続けることと思われる。

また、出土遺物には円筒埴輪や家形埴輪があり、発掘報告には竪穴式石槨や墳丘の調査成果も詳述されている。五條猫塚古墳とその出土遺物は、5世紀における対外交渉の物的証拠として注目されることが多いが、一方で、五條猫塚古墳が含まれる近内古墳群とその基礎単位としての集団内での位置づけや、日本列島内における集団間関係についても検討可能なポテンシャルを秘めた遺跡としての性格も有している。出土遺物の詳細な型式学的検討から、地域内での集団内関係について、そして日本列島内での集団間関係から対外交渉の様相まで、当該時期の有力者の小から大に及ぶ活動の動態を追究するための第一級の資料としてこそ五條猫塚古墳は評価する必要があるといえる。

近年の考古学的研究では、武具や工具などそれぞれ個別の遺物ごとに系統的ないし網羅的な研究が進展している。発掘報告は昭和37年(1962)の発行であり、当時において高い水準の報告がなされているものの、現在のレベルに合わせた精緻化と再資料化が望まれるところである。また、整理作業の過程で、保管資料の中にはこれまで未報告のものや、品目が誤認されていたものの存在が明らかになった。そこで、出土遺物全点を再度点検し、その出土位置や、形態・法量・製作技法などを明らかにした新たな報告書を作成することにした。さらに本報告で得られた所見を基礎に、遺物の個別研究や五條猫塚古墳の位置づけ、さらには古墳時代中期社会の特質に関する考察といった種々の問題についてまとめた総括編の作成を計画した。本報告を通じて、古墳時代における対外交渉の研究が深まることが期待される。

2 研究の経過

(1) 研究に至る経緯

五條猫塚古墳の発掘調査は、昭和 33 年（1958）におこなわれた。調査は末永雅雄氏（橿原考古学研究所長・関西大学教授（肩書きは当時のもの、以下同じ））の指導のもと、島田暁氏（橿原考古学研究所員）、網干善教氏（高田中学校教諭）らが発掘を担当し、報告書は主に網干氏が執筆・編集をおこなっている。この発掘報告に所載の日誌によれば、調査の発端は、同古墳が昭和 32 年（1957）に「開墾」された際に出土した遺物を地主が保管しており、折から来寧していた後藤守一氏（明治大学教授）を案内する過程で遺物を実見したことに始まる。掘り出されていた遺物は、蒙古鉢形眉庇付冑や鉄鏃、挂甲、環頭剣など石槨外から出土した遺物であったと聞き取り報告されている。類例のない金銅装の蒙古鉢形眉庇付冑が完全な形で掘り出されていたことは、同古墳の重要性を認識させるに十分であったと思われる。発掘調査はさらなる「開墾」を憂慮した緊急的な措置でもあったと考えられる。調査は昭和 33 年 3 月 21 日にトレンチを掘り始め、同 23 日から 29 日まで石槨内の調査、30 日には石槨外埴輪列下の遺物を調査、31 日から 4 月 6 日までほかの埋葬施設の有無確認や実測、埋め戻し作業をおこなっている。全調査期間は 18 日間。多様な遺物が出土した古墳の調査としてはやや短い感があるが、上記の緊急性と学校の春休み期間という切実な事情もあってのことであろう。

報告書は『五條猫塚古墳』と題して昭和 37 年（1962）に奈良県教育委員会から発行された。執筆・編集作業は網干氏の手による。整理を終えた遺物は、報告書が発行される昭和 37 年までの間に奈良県から文化財保護委員会（現在の文化庁）に移管されている。昭和 40 年（1965）には同委員会の所轄する奈良国立博物館に遺物がそのまま管理替えとなったことが、博物館側の記録からうかがえる。以後、蒙古鉢形眉庇付冑や龍文袴帯金具、鍛冶工具のセットなど本古墳の代表的な遺物は、同博物館の平常展や他館への貸与などによって頻繁に展示・公開されて活用されてきた。蒙古鉢形眉庇付冑に限っていえば、平成 16 年（2004）に中国・北京の国家博物館で開催された「扶桑之旅－日本文物展－」展に出品されたこともあり、国内のみならず国外からも関心を寄せられている。

その一方、博物館での展示に供されなかった遺物は、昭和 30 年代の整理状況から大きく変わることなく、収蔵庫内で手つかずの状態で保管されてきた。それらの中でも鉄製品は錆の進行が深刻であり、部分的な折損もしくは崩壊を始めたもの、鉄素材を折り重ねて鍛造したものが層状に剥離を始めたものなど、資料の保管上、このままの状態で放置することが適切ではなく、現状での記録・資料化や保存処理が必要なものが見受けられた。そこで、保存処理の予算確保や整理方法の検討を進めると同時に、これらの遺物の台帳作りや最低限の錆落とし、形状確保のための仮接合などの作業を始めることとした。特に鉄鏃や小札などの数が多い鉄製品に関しては、昭和 30 年代のまとまりを崩さずに箱に収納されているものが多く、その単位を元に出土地点や関連性を復原することも可能とみられた。そこで、収納箱の単位を丹念に記録しながら、遺物全点に関して台帳記録を作成しつつ、作業を進めることとした。この遺物を手にしながらの具体的な作業の中から、整理の計画や研究会の形成、今般の報告書作成までの計画などが話し合われることになった。以上のような学術的要請と、遺物の保管・維持の要請があいまって、遺物の再整理をおこなう気運を作り出した。

なお、遺物の出土地点の同定については発掘報告の記載だけでは判断できないものもあったため、当時の調査日誌や写真などの記録も探索したが、橿原考古学研究所にも相当する記録が見出されなかった。したがって、現存する遺物の丹念な整理作業が、今回の報告にあたってのもっとも重要な作業となっている。

(2) 研究活動の経過

本報告は、五條猫塚古墳の出土品を再整理した成果である。しかし、それは一般的な報告書刊行事業とは異なり、個々の研究者が自発的に整理・報告作業に参加してきた研究活動の成果を集結させたものである。五條猫塚古墳の出土品の中には、発掘報告で見落とされている、あるいは品目が誤認されている遺物があり、報告書の作成に際してはそれらを報告する必要があるばかりでなく、全体的にも今日的な研究水準に堪える精度の情報を確保する必要がある。その実現には遺物の種類ごとに定見を持ち、みずから観察、分類、実測をおこない、報告文の作成から論考執筆までを担える気概と機動力を持った研究者の参加が望ましいと考えた。そこで、大学院生を含む若手研究者が集まり、奈良国立博物館内に「五條猫塚古墳研究会」を結成し、報告の作成にあたることとした（メンバーと担当は後述）。

五條猫塚古墳の遺物の再整理を始める機運は、すでに平成 15、16 年頃より芽生え始めていたが、実質的な活動は平成 17、18 年にかけて少人数による遺物台帳作りから出発した。作業は全て奈良国立博物館内でおこなわれた。収蔵庫に保管されていた遺物の収納箱ごとにナンバーリングをおこない、出土地点や伴出を示す可能性がある一定のまとまりを確保しながら個々の遺物番号を与え、さらに発掘報告と対照もおこなった。この作業にはブラシなどによる鉄錆の除去や破損部の接合などの作業をともなった。すべての遺物がカウントされた時点で、これからの具体的な整理・報告、研究プランを話し合い、最終的な報告に向けた作業分担をおこなった。金属製品の実測にあたっては、全点を対象に X 線画像の撮影をおこない、図面の作成から観察、報告の作成はそれぞれの担当者が通しておこなうこととした。

平成 19 年度からの 3 カ年は、幸い科学研究費の交付を得ることができ（基盤研究 C「古墳時代中期における対外交渉の特質と地域圏の形成・展開過程」研究代表者：吉澤 悟）、金属製品ほぼ全点の X 線画像とカラー写真の撮影、および実測図の作成を飛躍的に進めることができた。その成果は、奈良国立博物館の研究紀要『鹿園雑集』第 12 号（平成 22 年 3 月発行）に中間報告の形で発表し、さらに日本考古学協会第 76 回総会研究発表（平成 22 年 5 月、於：国士舘大学、発表者：川畑 純）においても公表をおこなっている。平成 23 年度には財団法人仏教美術協会の研究助成金を得て残りの実測作業や写真撮影などの作業を進め（平成 23 年度研究助成金「五世紀における鉄器生産技術の革新について―五條猫塚古墳出土品を中心に―」研究代表者：吉澤 悟）、同時に個別の遺物に関して各自が研究論考の準備・執筆を進めている。

報告書は『五條猫塚古墳の研究』と題して平成 25 年から 3 カ年をかけて印刷・刊行をおこなう予定とした。予算の都合上、平成 25 年には写真図版編を、26 年には報告編を、最後の 27 年には総括編をそれぞれ印刷し、3 冊を揃えて 27 年度から一般に頒布をおこなう計画である。

以上の活動の年次経過はおおよ次の通りである。

2 研究の経過

～平成 16 年（2004） 再報告の可能性を模索。

平成 17 年（2005） 遺物の整理作業を開始、金属器の銹落としと台帳作成。

平成 18 年（2006） 遺物の整理作業の継続。

平成 19 年（2007） 科研基盤研究 C の採択。X 線画像撮影、実測作業などを進める。

平成 20 年（2008） 科研 2 年目。作業継続。五條市の現地の実地見学などもおこなう。

平成 21 年（2009） 科研 3 年目。中間報告の作成。

平成 22 年（2010） 作業継続。

奈良国立博物館研究紀要『鹿園雑集』第 12 号（3 月）に中間報告。

日本考古学協会総会にて成果報告（5 月）。

いずれも題目は「五條猫塚古墳出土資料の再整理とその新知見」。

平成 23 年（2011） 財団法人仏教美術協会の助成金を受け、追加整理作業。

平成 24 年（2012） 追加作業の推進。

平成 25 年（2013） 『五條猫塚古墳の研究』写真図版編の編集と印刷（3 月）。

平成 26 年（2014） 『 同 』報告編の編集と印刷（3 月）。

平成 27 年（2015） 『 同 』総括編の編集と印刷。

上記 3 冊を合わせて刊行・頒布（3 月予定）。 （吉澤 悟）

（3）報告の方針

報告書の作成は以下の方針で進めた。上記の通り、五條猫塚古墳出土遺物の中には発掘報告には写真や実測図が掲載されなかったものが多くあり、また、出土後長期間に渡る保管の過程で、銹化が進行し発掘報告時とは形態が異なってしまったものもみられた。そこで、発掘報告を参照した上で品目ごとに担当者を決め、特定の品目が中心的に保管されているとみられる収納箱ごとにその品目の担当者がナンバーリングや台帳作成などの整理作業を進めることとした。その過程で別品目の混在が判明した場合には、担当を当該品目の担当者に変更することとした。最終的には品目ごとに担当者が台帳を作成・管理し、続いて銹落しや接合検討、X 線画像と写真の撮影、実測図の作成を進め、報告文の執筆や製図を担当することとした。ただし、武具類を中心とする一部の品目については、実測などの作業量の問題から個体ごとに担当者を決定している。また、竪穴式石槨内出土の農工具については、出土総量が少ないためまとめて担当者を決定した。

品目ごとの報告の担当者は以下の通りである。

埴 製 枕：	加藤一郎	小 札 群：	初村武寛
銅 鏡：	岩本 崇	鉄 鏃：	川畑 純
眉庇付冑：	岩本 崇・川畑 純	刀・剣・鉾・石突：	岩本 崇
短 甲：	細川晋太郎・阪口英毅	斧	： 鈴木康高
頸 甲：	岩本 崇	鑿	： 鈴木康高・魚津知克
肩 甲：	岩本 崇	鉈	： 鈴木康高・阪口英毅

刀 子： 鈴木康高・魚津知克	鋤 頭： 岩本 崇
帯 金 具： 岩本 崇	鉄 床： 岩本 崇
飾 金 具： 川畑 純	鑿 ： 岩本 崇
蛇 尾・鉸 具： 岩本 崇・川畑 純	耳搔き状鉄製品： 鈴木康高
鋏・鋤 先： 魚津知克	ヤ ス： 鈴木康高
鎌 ： 鈴木康高	銚 ： 鈴木康高
手 鎌： 魚津知克	砥 石： 藤原光平
鋸 ： 魚津知克	不 明 鉄 製 品： 鈴木康高
ヤスリ状鉄器： 魚津知克	埴 輪： 加藤一郎
鉄 鉗： 岩本 崇	

本研究の大目標は、古墳時代中期における日本と東アジア諸国との技術・文化交流の実態究明であり、その追究のための具体的な作業として五條猫塚古墳出土遺物の再整理・再報告を掲げたことは上述の通りである。一方、そういった学術的な要請にともなう資料の再整理・再調査の過程で、遺物の劣化の進行が明らかになり、遺物の保管・維持の必要性が強く認識されるようになったことも先に述べた通りである。

遺物の保管・維持の手段としては、遺物の劣化の進行を遅らせるための保存処理や収蔵環境の改善などがあり、保存処理実施の前提として資料の品目や数量の確定は必須である。同時に、資料の現状や構造的な特質の把握も必要である。一方で資料を「残す」という意味において、次善の策として資料の現状の記録・資料化とそれらの公表といった手段も存在する。そのため、学術的研究と資料の保管・維持のどちらの作業を進めるにあたっても、いずれにしる資料の品目と数量を明らかにし、資料の現状や構造的な特質の把握を進めることが第一の作業として必要とされる。そこで、学術的な目的と資料の保管・維持という目的の両者に叶うものとして、写真や実測図の提示に耐えうる遺物については全点を実測し写真やX線画像を撮影し、報告書という形で提示することで資料化を果たす必要性を強く認識するに至った。

以上の理由から、本研究では五條猫塚古墳出土遺物の網羅的な再整理・再報告を具体的な実施作業として調査研究を進めることとした。そのため、本研究の遂行と、特に写真図版編と報告編の作成に際しては、まず第一に出土遺物の再整理・再資料化を果たす報告書としての性格を持つ点が重視されることとなった。

実際の作業では出土遺物の再整理・再資料化を中心に進めたが、報告文の執筆においては個々の資料の現状の詳述に努め、写真やX線画像、実測図の提示においても個々の資料の現状の情報をできるだけ多く盛り込むように心掛けた。その上で、発掘報告で提示された実測図や写真と対応できる点にも留意しつつ報告することを心掛けたが、対応が確定できなかった個体も多くある。第4章で述べるように結果的に出土位置の同定に至らなかった資料もあり、今後も継続的な同定作業が必要である。また、報告編での遺物の報告は、基本的に遺物の様相の記述に終始することとし、特定の先行研究に基づく分類の援用などについては遺物の理解の補助となる必要最低限の範囲に留めることとした。また、他古墳出土

2 研究の経過

資料との比較検討による詳細な時空間的な位置づけや類例の紹介についても総括編の考察でおこなうこととした。

写真図版については、モノクロ写真は将来的な保存性の点では優れている一方で、カラー写真は内包する情報量が多いなど、それぞれ一長一短がある。特に金銅製品を多く含む五條猫塚古墳出土遺物の報告では、金銅装と鉄製といった視覚的な対比が非常に印象的におこなえる点で、当時の器物の製作者や所有者が仮託したであろう器物の意義や象徴性などを考えることに繋がりうるなど、色情報の提示は非常に重要である。そのため、写真図版は、両者を提示するのが理想的といえるが、両者の提示には印本費などの問題が生じることになる。また、昨今のモノクロ画像に対する印刷表現技術の限界性という問題もあるため、本報告では写真図版編としてカラー写真を提示する方針を採用した。X線画像については、奈良国立博物館内での撮影可能フィルムサイズの問題から、蒙古鉢形眉庇付冑や短甲の一部、小札塊などでは1枚のフィルムで撮影できなかったものもある。それらの資料については、X線画像フィルムをスキャンし、デジタル化した上で、データ上で複数の画像を統合したものがある。

整理事業の過程、ならびに報告書作成の過程においては、報告書作成作業参加者による検討会を適宜おこない、整理事業の進捗状況やその内容、今後の課題について共有することとした。2010年までの打ち合わせでは主に作業の進捗状況や新知見の共有をおこなった。2012年5月の打ち合わせでは、写真図版編・報告編・総括編という分冊形式の採用と、それぞれ1年ごとの刊行スケジュールについて確認し、また写真図版編編集に向けた作業の確認と、考察執筆予定内容の検討をおこなった。2013年5月の打ち合わせでは報告編編集に向けた残り作業の確認と総括編編集までのスケジュールについて確認をおこなった。

なお、五條猫塚古墳出土遺物については、本報告書の刊行後は本報告書との対応が容易に可能な形での保管・収蔵方法を採用する予定である。本報告書では原則として出土位置ごと、品目ごとに番号を与えたため、その番号と現物を対照できる形での保管を想定している。それに加えて、それらの番号とともに以前の収蔵状況に関するデータについても保持することで、今後の再検討の際にも参照できるようにしたいと考えている。資料調査などの学術的な研究に利用しやすい資料の保管状況を確保し、かつ今後の積極的な展示・公開に資するような保管環境を整える必要があるといえる。報告書の作成段階ではまだ達成されていないが、今後の課題として記しておきたい。

(川畑 純)

五條猫塚古墳の研究

報告編

発行年月日 2014（平成 26）年 3 月 31 日

発 行 奈良国立博物館
〒 630-8213 奈良市登大路町 50 番地
TEL 0 7 4 2 - 2 2 - 7 7 7 1

印 刷 株式会社 天理時報社
〒 632-0083 天理市稲葉町 80 番地